「捨ててこそ得るもの」　　辻　　喜男

九月になっても暑い日が続いています。引き続き熱中症に気を付けながら日々を過ごしています。そんな日々の歩みの中で、最近あらためて感謝しなければならないことに気付かされました。市内全域にわたって行われているゴミの回収と、それに携わっている方々に対してです。税金を納めているのだから当然のように思っていました。しかしこの暑さの中で、月曜から金曜まで種類によって、午前になったり午後になったりしますが、毎日回収が行われています。先日、台風が紀伊半島に上陸したときも回収に来れるかどうかと心配しましたが、いつものように回収されていました。もし一週間でも回収が止まってしまったらどのような状態になるのかと恐ろしくなります。ただ今まで、回収が行われなくなった記憶もありません。回収担当者の努力の賜物と感謝しています。実際に回収に当たる方々には、生ごみを含む可燃ごみの回収の日は、カラスに散らされた生ごみを、独特の臭いに耐えながら手で集めて回収してくれている姿には頭が下がる思いがします。

わが家のごみ出しには、私も積極的に協力しています。その理由はごみを家の近くの収集所まで出しておけば、回収車が綺麗に持って行ってくれることでスッキリした気分になるからです。もしごみを出さずに家にため込んでしまうと、自分に対してもいい加減な人間になってしまうように思うからです。

聖書の中にも、人生に付きまとう名誉、地位、富などを「ごみ」と同じように「塵・芥」(ちり・あくた)と言って、それらを捨てることで、その後の人生がすっかり変わった人がいます。パウロと言う人物です。彼は生まれも育ちも能力も、当時の社会ではだれにも負けないエリートでした。しかしある日、復活のイエス・キリストに出会ってから、それまで持っていた社会的な地位や誉りを「塵・芥」と考えるようになりました。彼はキリストに出会ったことで、その後の人生が一変しました。パウロ自身「私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくたと考えています。」と書いています。それにしても彼が今まで大切にしていたものを捨てることができたのは、「キリストを知っていることのすばらしさ」のためでした。(「聖書」新改訳 2017 より引用)

その後、彼は世界宣教に生涯をささげ、新約聖書に多く手紙が遺されています。